

## 学生の主体性を育む大学教育実践の試み

令和三年九月九日(木)

### Zoomによるオンライン開催

ご挨拶

森茂起(甲南大学文学部・人間科学研究所長)

話題提供

友久茂子(甲南大学学生相談室)

渡里千賀(甲南大学学生相談室)

西浦太郎(甲南大学共通教育センター・学生相談室)

指定討論

山崎俊輔(甲南大学共通教育センター・学生相談室長)

企画・司会

高石恭子(甲南大学文学部・学生相談室)

○森 人間科学研究所の所長を務めております森と申します。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

私から簡単に、この研究会が持たれたいきさつに関係して少しお話ししておきたいと思えます。

これは、私と高石先生とのお話の中で、こういう企画をしてはどうかということが生まれてきたのですが、その背景としては、人間科学研究所のほうで、社会による子育てという大きな枠組みで、現在の少子化問題も踏まえて、子ども・子育て問題を扱ってきているという背景があります。子どもが

生まれてから成人するまで、また親世代となるまで、様々の段階で子ども・子育てに関する対策とか支援とか必要なわけですが、その中で大学がどのような役割を果たすのかも一つの重要な問題として、課題として考える。当然、大学における研究所ですから、それも視野に入れてきたわけです。

そうしますと、学生相談室の役割も、社会全体で子どもを育てていくという意味合いの中に位置づけることも可能ではないかと、学生相談室の先生方もそのように考えておられるところで、その視点から見た学生相談室の役割について、一度、各相談員の方々、あるいは実践されている方々の中で議論してみると、今まで見えなかった部分が見えてくるのではないかとということから、今回のこの企画になったわけです。

以前の、私が学生時代の学生相談室とは、近年、大分変わってきておりまして、というのは、私が学生時代は、大学生は大人といえますか、家を離れて自立している。親のこともなんかはあんまり聞かないでほしいみたいな、そういう感覚だったわけですけども、今はむしろ高校からの延長で、保護者も含めて大学が支援していくという役割もありますし、学生たちも、この大学にいる四年間の間に、いかに大人になっていくのかが大事な課題になっている。これも、子どもが育ち、社会の一員になっていく過程でもありますし、また、近い将来に自分が親になることの準備期間でもあるという意味

で、学生時代の重要性って、ますます高まっているのではないかと思うわけです。

そういった中で、学生相談室がどんな役割を果たしているのか、今日のテーマにもなっていると思っております。ぜひ、活発な議論が展開することを楽しみにしております。

以上で、簡単ですが、私の挨拶に代えさせていただきます。

○高石 森先生、ありがとうございました。

企画趣旨の御説明、学生相談室の側からも少し補足をさせていただきます。

研究所では、現在も進行中の三つの大きな研究テーマがありまして、その一つに、子ども・子育てがあります。学生相談室におきましても、個々の学生の主体性の育成、それから発達促進を目的として、各種の心理教育的なプログラムを展開してきました。一八歳から二〇歳前半の学生の皆さんの心を、大学としてどう育てていくのか、学生と親御さんとの関係をどういうふうに支援していくのか、そういったことも現代においては、広い意味での社会による子育ての問題と捉えることが可能であろうと思っております。

本日は、学生相談の関係者の他大学の方も来てくださっていますし、学生さんも御参加くださっているということで、

また学生の立場から見たときに、大学にこういうことを今後求めたいという要望、御意見もいただけるのではないかと期待をしております。いろんな視点から話が発展することを、今回楽しみにしている次第です。

甲南大学の人間科学研究所と学生相談室は、二六年前の阪神・淡路大震災の復興の過程で、様々な心の危機に関する実践研究を共同して行ってきた歴史がございます。今回、このような機会を頂きまして、学生相談室カウンセラーが、これまで学内で展開してきた、学生を育てようという取組を振り返る、そういうチャンスにもなっているなと思って、大変ありがたいと思っていますし、また、今、意義を再確認して、今後どのように発展させていけばよいのかを、この機会にいろいろ、私たちも振り返りながら考えてみる事ができたらと思っています。

後半、できるだけ少し話せる時間を取っておきたいので、先に進めていきたいと思えます。学生相談室長の山崎先生には、後ほどまた指定討論で、まとめてお話をいただける予定になっております。

前半、二五分ずつ、三名の学生相談室カウンセラーの先生に御発表をいただきまして、少し休憩を挟みまして、後半の指定討論とディスカッションと進めていく予定にしております。どうぞよろしくお願いいたします。

早速、お一人目、友久茂子先生に「IT化社会を生きる若者へのリアルな体験の提供をめざして」というテーマで御発表をいただきます。

本学の学生相談室では、司会の私と同様、最初から長年活動をされてきたカウンセラーです。

では、友久先生、よろしくお願いいたします。

## IT化社会を生きる若者へのリアルな体験の提供をめざして

○友久 甲南大学学生相談室のカウンセラーの友久です。

六年前に教員職を辞めて、パワーポイントの使い方もすっかり忘れて、不手際もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いたします。

甲南大学の学生相談室が学生部から独立しましたのが一九八九年ですが、私は九〇年から常勤状態で、一週間に四、五日勤務という形でお仕事をさせていただくようになりました。ちょうどその頃からパソコンが一般に普及し始め、学生相談室にもパソコンがやってきました、カードに記入していた利用者登録を、若いスタッフに教えてもらいながら、パソコンに入力し始めたのを覚えていきます。

パソコンもそうですが、臨床心理士という資格もちょうど

その頃に出来まして、私もその資格を取って、初めは心理療法にかなりかぶれていました。しかし、学生相談室のカウンセラーになってからは、何かそれだけでは駄目ではないのか、何か今の若者に求められていると考えるようになり、自分の学生時代を考えてみたら、体験の質や量というか、遊びも含めて社会と触れ合えるような体験が不足しているのではないかと、自分勝手にですが感じておりました。

## 体験は必要なのか

でも、体験が必要と感じながら、実際にどこかで検証されているかなと心配になりまして、今回のこのシンポジウムの中で、いろんな文献やネットを探していたら、今年の七月二一日の朝日新聞の論壇の中に、最近言われている子どもの貧困は体験の格差なのだという記事が載っていて、そこから調べてみたら、国立青少年教育振興機構が、日本の青少年の自己肯定感が諸外国に比べて非常に低いことから、全国の二〇代から六〇代の男女五、〇〇〇人を対象にウェブアンケート調査を行っておりました（国立青少年教育振興機構「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」二〇一七年）。家族行事や家族としていろいろな行事に参加したかどうか、遊びをどれぐらいしたか、手伝いをしたかという日頃の生活習慣と、その後大人になってからの自己肯定感、ここではへ

こたれない力とか、落ち込んででもすぐ元気に振る舞える力を想定して調査しています。

そうしますと、家庭の行事とか、友達との外遊びとか、中学校なんかでしたら委員会活動をたくさんした人ほど、社会を生き抜く力が高いことが分かりました。

そのほかの結果としても、当時はまだ昔のことで、子どもの頃に家庭の教育的・経済的条件に恵まれなかった人でも、家族でスポーツをしたり、自然の中で遊んだことや、友達と外遊びをしたことが多かった人は自己肯定感が高いという結果が出ていたので、私が勝手に体験は必要と思っていたことが、一応この調査では、数的な科学性を持って検証されているのではないかと考えております。

### 「体験の必要性」が語られ始めたときのこと

体験の必要性が語られ始めたことを考えてみますと、学生相談室が出来た頃、兵庫県では全国で「トライやる・ウィーク」を開始しております。これは、生きる力を育むことを目的として、兵庫県内の公立中学二年生を対象に、一週間の職場体験、例えばスーパードレストラン、福祉体験としては保育園とか介護施設、勤労生産活動ではいろいろな工場とか、地域での様々な体験活動を実施しています。これを教育の世界の人たちがなぜ考え出したかといいますと、一九九五年に

阪神・淡路大震災がありまして、ここでボランティア活動をしたという体験が、非常に意味があったと考えられているからであるように思います。

震災直後のことを思い出しますと、私の娘がちょうどその頃にアメリカの西海岸のシアトルの大学に留学をしていました、そのときに、あちらでは留学生を対象にしたカウンセラーがいるのですけども、その人にすぐ呼び出されて、「あなたのふるさとは大変なことになっている。すぐ帰国しなさい」と言われたそうです。

日本では、ボランティア元年だったのですが、アメリカのボランティア文化を知って、私も学生相談とは何かを考えるきっかけになりました。カウンセラーがそういう教育もするのだと学びました。

実際、一週間程して帰ってきたのですが、娘たちが小学校や中学校で、小学生や中学生と一緒にボランティア活動をしているのを見ると、生き生きと活動しております。それが体験の必要性考える一つのきっかけになりました。もう一つは、一九九七年に神戸では連続児童殺傷事件が発生します。これは御存じのない方も多いと思いますけれども、俗に「酒鬼薔薇事件」なんて言われて、一四歳の少年が、もっと幼い子どもさんを猟奇的に殺して、大体四か月ぐらい犯人が分からなかったのです。そのときに教育の世界の人たちが、

何か体験が足りないのではないかと考え、体験学習をさせましょうということ、この「トライやる・ウィーク」が始まったようです。

もう一つの出来事としては、これはもっと以前に、詰め込み教育への批判を受けて、一九七七年に学習指導要領が改訂されて、受験戦争と落ちこぼれ対策として、授業時間数の削減をした「ゆとり教育」があります。でも、実際に「ゆとり教育」が始まったのは一九九五年から二〇一〇年の一五年間ほどですけども、これも恐らく、何か体験をさせたほうがいいのではないかとということで考えられたことだとは思いません。

私もその頃に子育てをしていて、勉強以外の体験も大切なんやと感じていたのですが、この件については、文科省も体験が重要だと明確にはしていませんし、むしろ結果的には学力の低下が言われて終わってしまったのです。しかしおそらく、これも体験が必要だと感じたことで始まったことではないかなと推測しています。

### 学生相談室でカウンセラーが体験したこと

ちょうどその頃、学生相談室のカウンセラーである私が体験していたことは、恐らく他大学の学生相談室でも感じられたのではないかと思います。神戸の連続児童殺傷事件に

影響を受けたのではないかと思われるような、事件性を持ったケースが増加します。

神戸のこの猟奇的な事件は、事件後に、挑戦状のようなものを赤ペンで書いて、警察に送ったのですが、実はこの大学でもそれを真似たような事件が起こりました。まだあの頃は穏やかで、レポートなんか出すのも、事務室にばいと思いきに行くだけです。そしたら、今という発達に問題を抱えたと思われる男子学生が、自分が気になる女子学生のレポートを取ってきて、それに赤ペンで挑戦状みたいなものを書いて、それを戻しておき、さらに女子学生の机にナイフを突き刺して脅すというようなことが起こりました。

そのときに、これはとても私一人で対応できることではないと思っただけで、色々な部署にお願いをしました。被害学生と加害学生と一緒に授業を受けるときには、教務の方に「教室に見回りに行ってください」とか、学生部の方には「守衛さんを置いてください」とか、あるいは指導教員の先生には、「しんどそうな人には、ちょっと声かけをしてください」みたいなことを申し上げたら、本当に教職員の皆さんは一生懸命協力して下さいました。そのときに、心理教育というか、大学関係者みんなで育てていくことが大切だと学びましたし、学生相談は、個別の心理療法だけではそれほど役に立たないと感じました。

また、学生相談室では、個別の心理療法は一生懸命やっていたのですけれども、やってくる学生が人格障害レベル、例えばかなり重い摂食障害ですとか、解離とか、あるいは意識障害を持った方も来室されるようになりました。それについては、私が『イメージの治癒力をめぐって』（創元社、二〇一七年）という著書の中で事例として挙げていますので、また読んでいただけたらありがたいと思います。

とりあえず、そういったことがあって、言葉だけのカウンセリングだけでは、やっぱりなかなか難しいのではないかと思っている頃に、この一八号館、現在私たちが活動している学生相談室のある場所ですが、そこで箱庭とか、いろんなグループ活動ができるような設備が整ってきました、そういうことをしっかり実施できるようになりました。

その頃、箱庭を熱心に置いていくことで展開していった女子学生さんと、今三〇歳代になって一般社会で元気に活躍してられる卒業生がいらっしやることを思い出しました。それで、この研究会の企画として、「箱庭を置いたことにどんな意味があったかを、今振り返ってお話を聞かせてもらえませんか」と呼びかけましたら、快く応じてくれました。彼女の在学中の状況については、個人情報に関わることで申し上げにくいので、かなり重い心理症状を抱えてられたことだけお伝えして、「箱庭にフォーカスした当時の記憶を語ればい

いですね」という彼女の言葉から、皆さんが彼女のことをイメージしていただけたら幸いです。

彼女は入学初期から卒業までの四年間、断続的ですが学生相談室に通ってくれました。絵もたくさん描いてくれましたし、箱庭は毎回ではありませんがかなりたくさん置いてくれました。彼女が語ってくれたのは、「絵が好きだったけれども、思いどおりの絵が描けない。描けないと落ち着かなかった。箱庭は、ひかれるものを見つけると、そこから自然に自分のイメージが広がった。初めのうちは木などの自然と建造物しか置けなかつたけれども、時間の経過とともにだんだんと動物が置けるようになりました。」「初めは原始社会に共存し、最終的には現代に近づくことができたと思っています。それによって、他者への信頼感が増えていった気がします。私にとってはありがたい表現方法でした」というようなことを語ってくれました。これはまさに自我形成といえますか、主体性の確立につながっていくことだったのでないかなと思っております。そして、「今も箱庭を置いてみたいかなと思うんだけど、実際にはなかなか置けるところがない、大人になるとなかなか箱庭には出会えないんですよ、今も箱庭のできるようなところがあればいいなと思います」とも話してくれました。

## 体験型グループワークの本格的開始

学生相談室に箱庭療法の設備が充実したと同時に、一八号館という立派な建物が出来たことで、体験型グループワークを本格的に開始します。私にとりましては、一八号館は震災後の復興の象徴で、自分の中に何かい로운なイメージが生まれてきて、かなりワクワクしていた記憶があります。それまで古い日本家屋で、どちらかと言えば、細々と面接をしている学生相談室だったので、どこかいとところに学生相談室が出来ないかというのは、先生方ともいろいろお話しすることがあったのですが、震災のおかげと言うとおかしいですけど、震災があって、五年後にはなりませんけれども、二〇〇〇年に一八号館が完成をいたしました。

森先生がよく御存じですが、多分文科省から助成金があったのだと思いますが、建物とともに潤沢な資金によるグループ活動が可能になってきます。本当に非常にありがたかったと思います。

グループ活動の場所としては、グループワーク室、サロン室が出来ましたし、三階に講演室が出来たおかげで、いろんなグループ活動が出来ることになりました。それまでもやっていた年二回のグループ活動を、外部の講師をお招きしてすることになったのですけども、そのときのいろいろな経済的な問題も非常にスムーズに解決をしました。それまではグ

ループ活動のための材料費など、ものすごく小さなお財布でやっていたのが、少し豊かな感じで実施することができまして、場所と予算の問題が自然に解決していったような気がします。

グループの具体的な内容ですが、どんなことをしてきたかといいますと、グループワーク室は畳と障子の部屋を作ってほしいと建築段階から言い続けて、紆余曲折がありながらも、茶の湯ができる場になり、茶の湯のグループを開始します。茶の湯は私が教えることができることもあったのですが、非常に五感を鍛えますし、しかも近年忘れられがちな日本文化を学ぶ場として、すごく意味があると思っていました。

二〇〇〇年から二〇〇九年までの一〇年間、茶の湯のグループを年に二回のうち一回はしてまして、京都の裏千家から専門家に来ていただいて、教えていただくということをしました。ただ、二回のうちのもう一回のグループワークをしましょうと考えていました。だから、スポーツチャンバラとか太極拳なんかもしてますし、嗅覚を鍛える香道なんかも実施しました。

これがお茶の様子です（写真1）。着物を着ている男性が私の知り合いで裏千家の方ですけど、この人は、たまたま甲南大学卒業生だったことも幸いして、非常に快く、京都から



写真1 茶の湯



写真2 香道



写真3 カブラ

す。

### 五感のトレーニングとしての茶の湯

こういうグループをしたのですけども、茶の湯だけを特化して見てみますと、大体参加者も三〇人近く、少なくとも一二人とたくさんの方の参加者に来ていただき、おおむね

美味しいお菓子を持参して来て下さいなんて、ちょっとわがままなことを言っても、対応してくれました。

香道体験もすることができて(写真2)、左端で着物を着てらっしゃる女性は、四〇年近く甲南大学で心理学を教えられる松尾恒子先生で、懐かしいですが、こんな感じで、身体や感覚を使うことでカウンセラーのできることを何かやってみる、みたいな感じでしていたわけです。

これはカブラ(写真3)、松の木でできた一〇センチの長さの板を組み合して形を造るものです。幼稚園や保育園ではたくさんありますけども、これを組み立てるのも、独特の体の動きを感じたり、細やかに手を使い、最後にぱっとつぶしたときの響きや板の動きの快感はなかなか素晴らしかったで

好評でした。振り返り用紙に記入していただきましたら、「初めての体験だが、思ったより堅苦しくない」とか、あるいは「和菓子や抹茶がすごくおいしかった」とか、もともと平安朝時代の遊びですから、そういう話もしますと「茶の湯が遊びだというのに驚いた」とか、「茶道という堅苦しいですが、お茶が遊びとして楽しめてよかった」と書いてくれる人もありました。

お茶の先生がお弟子さんを連れてきてくださって、その方が和服を着てお点前をしていたくださいますと、「お茶を点てる人の動きも美しい」ということを感想として語ってくれることもありました。

参加者の評価も高かったし、学内連携、例えば国際交流セ



ンターの人が留学生も連れてきてくれたり、あるいは、ゼミの学生さんの希望者を連れてきてくれたりということがあって、非常によかったとは思いますが、年に一回やってみてはたして五感体験になるのだろうか、私はその頃にも疑問にも感じていたのです。もうちょっと継続的なことが必要ではないのかなと感じているところで、二〇〇七年から、全学共通教育科目の一つとして、少人数の人数制限のある科目で何かやれるのではないかという機会を与えていただいて、「自己の探求」という名前をつけてもらって、その一つとして茶の湯の実施が可能になりました。

けれども、年に二回外部から講師を招いてグループ活動を続けていて問題になってきたのは、茶の湯ももう一つのグループも、だんだんと参加人数が減ってきたことがあります。そうすると、一般学生に心理教育をしたいと思っても、参加者が五人とか一〇人以下だと、すごく準備が大変な割には、これでいいのかどうかということも感じ始めました。そのときに考えたのが、やっぱり一八号館のここにとどまっていたは、なかなか一般学生さんへの教育はできないのではないのかということ、本校舎内へ場所を移動する案が出ました。たまたまそのときの室長さんが体育の先生だったりして、小体育館でしたらどうですかという助言もいただきました。本校舎へ場所を移動するということが、一応一〇年続けた茶の

湯のグループは終わりました。その代わり、「自己の探求」という授業で茶の湯を実施することができるようになりました。年二回のグループワークとは別に、もう一つ、週に一回継続型のグループ活動も始めるのですけど、これは多分、後から渡里先生がお話ししてくださるので省きます。

### 「自己の探求」の開始

「自己の探求」という授業がどういうものか、これも後で西浦先生がお話ししてくださるのですが、どんな形で始まったのか、最初のころの様子を少し説明したいと思います。

「自己の探求」は、履修希望者四五人を募って、それを出るだけ学生の希望に添って三つのクラス、①「茶の湯」、②「グループ体験」、これは一般に言うコミュニケーションを目的としたようなグループ体験で、担当者によっては「朗読」をしていたときもあります、もう一つは③「陶芸」でした。つまり、心理学の専門家であるカウンセラーが、自分の得意な分野で体験的な授業を実施するという形でした。しかし、一応、全学の授業なので、希望者が履修出来ないという事態を避けるために人数制限をせず講義を中心として、グループワークも少し取り入れたクラスも「自己の探求④」として専任カウンセラーが持っていました。また、この授業の四クラスの受講者は全員授業の最初と最終回に情動知能を

測るEQSを受けて頂きました。

そして、体験中心の三クラスの場合は、オリエンテーションを含めて三回全体講義をし、その後、各クラスに分かれて活動しつつ、近くの川に散策をしながら美術館の見学とかは合同授業として四五人で行っておりました。あるいは、このクラスに参加した人は、茶の湯のクラスの人は「陶芸」と「グループ体験」を一回体験でき、陶芸クラスも「茶の湯」と「グループ体験」ができるというふうにローテーションをして、いろいろな体験をできるように工夫をしていました。

### 授業としての茶の湯体験の意味

茶の湯のクラスでは毎回振り返りを書いてもらっていましたので、本当に意味があったのかどうか、その記述を調べてみましたら、「抹茶や和菓子に新鮮さを感じていた」とか、茶の湯は儀礼なので、「一畳の畳を四歩で歩きなさい」とか、おじぎの仕方にも「真・行・草」ってあるんですよとか、そういう型をまず説明をして、体験をしていただきましたので、そういう「儀礼」への関心を示してくれた人もいましたし、その型をやるのが「ものすごく難しい」と書いてくれた人もいます。

また、茶の湯は総合文化なので、お花も生けますし、書を読むこともしますし、お茶碗とかいろんな陶器も使います、

漆器も使います。そういうものを鑑賞することへの興味を示してくれた人もいました。あるいは、受講者の多くが、やっぱりお茶とお菓子を出したせいだと思うのですが、「いろいろ準備、ありがとうございました」とか、「大人になって、大切にしてもらってない気がするけど、ものすごく大切にしてもらったような気がする」ということを書いてくれた人もいました。

こういった思いを持つということは、やっぱり主体の育成といえますか、自我形成というか、そういうことに何らかの役に立ったのではないかとは思いますが、数字では表せないので、非科学的といわれても仕方ありません。

しかし、この授業では先ほども言いましたように、初回と最終回に情動知能を測るEQSを実施していました。その結果を、他のクラスを担当していたカウンセラーが分析しています。これを見ることで、グループの授業をやったこと意義があるかないか、いくらかでも数量的に分かるのではないかと思います（青柳寛之・大谷祥子「カウンセラーによる全学向け少人数体験授業の試み（第二報）」グループ体験コースを中心とした概要の紹介と受講者アンケートの分析」甲南大学学生相談室紀要第二二号、二〇一四年、一五―二七）、青柳寛之「カウンセラーによる全学向け少人数体験型授業の試み（第三報）」授業の前後に実施したEQSの結果から二〇一三―二〇一八年

度を概観する―」甲南大学学生相談室紀要第二七号、三六一四八、二〇一九年）。

EQSによる検証結果を見てみますと、EQSの項目は「自己対応領域」「対人対応領域」「状況対応領域」になります。「自己対応領域」とは「自己の心のはたらきについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力を評価」で、「対人対応領域」とは「他者の感情に関する認知や共感をベースに、他者との人間関係を適切に維持することができるとする能力を評価」で、「状況対応領域」は、集団を取り巻く状況の変化に耐える力、リーダーシップ、状況に応じて能力を使い分ける統制力を評価」と説明されています。

第二報の分析結果では、それぞれの領域について概ね、茶の湯クラスも、陶芸クラスも、グループ体験クラスも、それぞれ半期授業の開始時より終了時の方が数値は上昇し、何らかの効果が認められました。それに比べて、「講義＋実習」の人数制限のないクラスでは「対人対応領域」のみ値の上昇が認められましたが、「自己対応領域」や「状況対応領域」については上昇が認められませんでした。対人対応領域で、茶の湯や陶芸ではあまり直接に人間関係は扱わないにもかかわらず、数値が上昇したことについて、青柳は、「少人数のワークを継続的に行うことに意義がある」と述べていますし、状況対応領域が一五人に人数制限したクラスで数値が上昇して

いることについては、「他者と交流しながら自らの心の動きに着目する授業に効果があった」と分析しています。EQSの調査結果や分析について、条件など詳細な点に留意するべき点は残されていますが、体験を重視した少人数による授業についてのEQSの結果は、主体の育成を目指す教育として、何らかの役割を果たした事を物語るのではないかと思えます。時間が来ましたので、この辺で終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

○高石 友久先生、ありがとうございました。

ここで、また質問を受けておりますと時間が押してしまいますので、すぐ次の御発表に移らせていただきたいと思います。

お二人目は、渡里千賀先生に「学生の成長に関わる場としてのグループ活動―学生向けグループワークの運営体験から―」というテーマで御発表をいただきます。

渡里先生は、学生相談室のグループプログラムの担当者として、長く学生の心理教育のために奮闘をしてくださっています。その立場から、お話をどうぞよろしく願います。

## 学生の成長に関わる場としてのグループ活動

― 学生向けグループワークの運営体験から ―

○渡里 学生相談室のカウンセラーをやっております渡里です。

二〇〇七年からグループの活動に携わせてもらってたので、一四年目になります。今日はよろしくお願いいたします。

最初に、私が今担当させてもらっている「金曜Reアワー」の概要についてお伝えさせていただいて、次に6種類のグループ活動についてピックアップして紹介し、その後で、そういうグループを通して見られる学生の成長と、主体性を引き出すために、どういうことを工夫してプログラムを計画していたかについてお話しさせていただいて、最後に考察に移りたいと思います。よろしくお願いします。

初めに、友久先生の話にもあったんですが、受験中心の学校生活や自然の少ない都会生活によって、近年、体験不足のまま大学に入学する学生が増えていると思います。二〇〇七年から私が担当している「金曜Reアワー」では、特定のスキルを磨くことを目的とするのではなくて、体験不足の学生が五感を使うグループ活動を体験することで、主体性・協働性を育み、人として成長できる場になり得ることを目指して運営しています。今回、発表するに当たって、改めてグループ

活動が学生に与える影響と、プログラムを運営する際の自分の工夫点を振り返ってみたいと思います。

### 金曜Reアワーについて

まず「金曜Reアワー」の概要についてご説明すると、二〇〇〇年度より開催している学生向けの体験グループ活動です。授業のある期間中、金曜四限、二時四〇分から四時一〇分の一時間半開催しています。場所は、主に学生相談室内のサロン室、グループワーク室、これは畳の部屋になってます。あと、音楽療法室、園芸療法スペース、これは屋外の畑です。そのほか、野外に散歩に行く場合もあります。

甲南大学は交通の便のよい場所にあるんですけど、プラス、とても自然に囲まれ、恵まれているので、近くの住吉川とか保久良山といった、すごく気持ちのいい散歩コースに出かけたりすることがあります。

実施回数は、前期一五回、後期一五回、計年間三〇回です。担当スタッフは、私と事務の方にも手伝わってもらっています。その他、プログラム内容によって、金曜日に出勤されているほかのカウンセラーの方にもお願いする場合があります。なぜか歴代、金曜日に来られるカウンセラーさんたちは一芸に秀でていらっしゃる方が多くて、陶芸、園芸、友久先生も茶道を担当して下さったりと、自分の特技をグループに反映

させていただけることが多くて、とても助かっております。

のべの参加人数は、二〇一九年度は一六四人、平均参加者数は五・七人。一回に大体五〜六人の方が参加しています。

「金曜Reアワー」の「Re」の意味ですけど、英語の「再び」の意味から取っています。あと、英単語の「Re-fresh」「Relax」「Re-cover」などの頭文字のイメージも持っています。

メールの返信でも使われていたりしていて、若者になじみ深い名前かなと思って、つけました。実は二〇一〇年に、もともと「ウィークリーグループ」という名前だったんですけど、そこから改名しています。二〇〇九年ぐらいに参加者が減少した時期がありまして、何とかしなきゃという工夫のうちの一つで、若者になじみやすい名前に改名しました。

実施目的は、五感を使い、身体感覚に注目していく場、人間関係を構築していく場、居場所、それと、必要に応じて個別相談へ導入する機会として活用したり、逆に個別相談から仕上げの段階として参加していただくという場合もあります。プログラム内容は、園芸、料理、陶芸、アート・工芸、書道、音楽、アロマスプレー作り、ストレッチ、ゲーム、野外散歩など多岐にわたっていますというか、その時にできることをやっているという感じです。

主な六つのプログラムについて

まず、一つ目は園芸のグループです。一八号館の屋外に畑がありまして、そこで畝を作って野菜栽培をしています。サツマイモ、ジャガイモ、大根、ミョウガ、ピーナツなんかを育てています。そのほかに、プランターで夏野菜やハーブを作っています。トマト、オクラ、キュウリ、ナス、バジル、シソなどを作っています。あとは、季節の花の寄せ植えで、学生相談室の建物の入り口近くに設置しているので、グループ以外の学生相談室の利用者の方たちの目も楽しませてもらえないかなと思います。今はヒマワリが目立っています。その他、一二月には、切り花を使ってクリスマス風のフラワーアレンジメントを作ったりもしています。

園芸の場合、生きている植物を扱うため、グループの時間以外にスタッフがどうしても動かないといけないこと多くて、畑の維持であったり、水やりであったり、土壌作りであったりが多いです。例えばサツマイモの苗は、期間限定で一週間だけ急に売り出されるのですが、その時期と「Reアワー」の実施日が合わない場合もあるので、そういった時は、急にプログラムの内容調整が必要になってきたりもします。

これが園芸プログラムの「春のガーデニング」です（写真4）。屋外の畑で、サツマイモの苗を植えています。



写真4 春のガーデニング

後期にはサツマイモからお菓子を作ったりしています。なるべく家でも再現できるように、「簡単、準備要らず、家でももう一回作ってみたいな」と思えるようなものをレシピに入れるようにしています。料理は本当にスキルに個人差がありまして、包丁の使い方一つでも「今日初めて握りました」という人もいれば、「ふだんから家でもやっています」という方もいて、本当に様々です。料理中それぞれが自分の着眼点で動き方をしているのが面白いなと思います。昨年からコロナ禍で、残念ながら料理のプログラムは現在実施できておりません。今は収穫した野菜と使えるレシピを希望者に持ち帰ってもらうことになっております。収穫した野菜を料理のプログラムで使うことで、過去に「トマトが苦手で食べられない」

次に、料理のプログラムでは、主に先ほどお話ししました園芸プログラムで収穫した野菜を使用することになっています。「旬のものを味わう」「この季節だからこの野菜」を大事にしています。

前期のグループでは、先ほど見せました夏野菜からピザやパスタを作ったり、あと、

と云ってた学生さんが、「食べることができた」と喜んで報告してきてくれたことがあります。「苗から成長を見ていたので、すごく安心して愛情を持つことができた」とお話をされていたのが、とても印象に残っています。

これが、トマトを使って、パスタとピザの具にしたものです（写真5・6）。担当してくださったのが西浦先生で、すごく素材の味を大事にしていたいて、味つけはシンプルに塩とオリーブオイルだけとか、本当に野菜の味を楽しめるようにしてくれました。

こっちは、サツマイモのお菓子作りをしています（写真7）。たこ焼き器で大学芋を揚げています。他にも、クックパッドなどを参考にしたりして、ココナッツミルクを使ったり、ウサギの顔型の饅頭を作るなど、形や調味料にちょっと映える



写真5 収穫物でクッキング①



写真6 収穫物でクッキング②



写真7 収穫物でクッキング③

ものを使うのが特徴かなと思いましたが。

次は、書道のプログラムの書道は畳の部屋のグループワーク室で行います。畳の匂いとか墨の匂いを体感していただくことができるのが、いいなと思います。小・中学生の時に、たいの学生は授業で書き初めや課題の経験があるので、墨を使ったり、毛筆を使うことに対しては割と抵抗なく参加してくれています。

一応自由に書いてもらうことにしているのですが、念のため、季節の言葉などの見本も用意しています。そうしますと、見本を見ながら、書道として字の配置や筆運びに気をつけながら書くことを楽しむという学生と、本当に自由に半紙に好きなことを書く学生に分かれます。イラストや歌詞を書いたりとか、あと、アニメとか映画のセリフを書いたり、その時の自分の気持ちを書いたり、駅名を書いたりという学生もいました。

こちらで少し面白かったなと思うのが、『楽』という字を楽しいイメージの書体で書いてみましょう」とか、『哀』と

いう字を哀しいイメージの書体で書いてみましょう」とお題を出したことがあります。その時ある学生さんが「頭痛」と書いて、この字がすごく震えてしんどそうな字なんです。「苦しい」と書いた方もいて、紙が破れる程の筆圧ですごく重々しく書いていました。そういう書体と気分の表現を楽しむこともありました。

また、共同制作をやったこともありまして、一人一画ずつ大きな紙に一つの漢字を決めて書くことをしました。今まで書いた漢字は、「桜」とか「幸」とか「嵐」などです。「嵐」に関しては、ジャーニーズのグループの嵐が好きな学生からの提案もあったんですけど、当時二〇一二年という年は災害が多い年で、それで「嵐」に決まった感じでした。共同制作



写真8 書き初めをしよう

を入れると、前半に参加者がそれぞれ個々の作品を書いた後で、共同制作を行うので、個人とグループの両方の時間を体験することで、グループ活動の流れとしてはまとまっているというか、動きもあって面白かったなと思います。これが書道プログラムの中の「書き初め」です(写真8)。

一月に書いていただったので、三回生が「就活嫌だ」と書かれたりとか、そしたら、横で四回生が「卒論も嫌」と書いたり、相互の反応がちょっと面白いなということを感じています。

次はアート・工芸です。アート・工芸は、まず既成のものとか枠をまず用意して、あとを自由に表現していただく形でやることが多いです。工芸では、出来た作品が日常使いたくなるようなもの、持ち帰りたくなるようなものにするを指しています。見本は用意します。これは体験不足であったり、全く作ったことのない学生は、どういふものを作るのがよいのか、目指す方向も分からない人もいるので、それ为例として用意します。見本通り作る人はあまりいないように思います。すぐできる子はどんどん自由に作るし、できない子は見本の形を目指すけれど、やっぱり途中から自由な部分も入れてきたりするので面白いです。

材料は、学生さんを対象にしているので、学生さん自身やりたくなったり、興味を持ってもらえるものを目指したいと思っただけ、なるべく本格的なものを用意したいなと思っただけ、例えば絵手紙というプログラムでは、水彩絵の具ではなくて、日本古来の顔彩を使うなど、そういうことで本格的なものを目指しています。今までやった工芸は、エコクラフ、デコパージュ、石けんづくり、マスクカバー、絵手紙、

切り絵、コラーージュ、マンダラ塗り絵などです。エコクラフトは、野菜とかお米なんかの穀物を入れる袋の再生紙を使ったバンドのことで、そのバンドを使って小物入れや、かごを作ります。デコパージュは、好きな絵やデザインを切り取って、無地の小物に写し取るというものです。無地の小物は、布かばんやマスク、石けん、スマホケースとかで、それに自分の好きなものを写して、オリジナルなものを作るといふのです。それと、コロナ禍で始めたのが、石けん作りとかマスクカバーです。石けん作りがなかなか人気で、石けんの基のグリセリンソープを使って、食紅とかアロマオイルを足して作るのですが、ちょっと宝石風に入れたり、傷を入れたりすることで、ちょっと鉱石みたいになります。エメラルドやアクアマリン風の誕生日石を作りたいという子もいますね。



写真9 切り絵でアート

これが一例、「切り絵でアート」です（写真9）。七月だったので、うちに自分が作った切り絵を貼って、オリジナルなうちわを作るといふものです。

次が、「マンダラ塗り絵」で



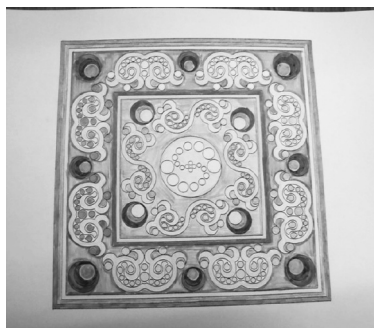


写真10 マンダラ塗り絵

す（写真10）。マンダラというのは、仏様や神様を規則正しく対称に配置した図というか図案のことですけれど、マンダラ塗り絵は、あらかじめ描かれたマンダラの下絵に好きなように色を塗るものです。これは結構、時間がかかって集中力も要

ると思うんですけど、気に入る子はすごく気に入って、その後で自分でグループ外の時間に個人的に作品を使って作り続けて、それをA4のファイルに保管して、コレクションにして時々見せてくれる学生さんも過去にいました。

次は音楽のグループの紹介です。その中の「トーンチャイム」というのは（写真11）、ハンマーつきのアルミ製の筒で、振ると、一本一音の音が出ます。数人で音を分担します。大体一人一本から三本ぐらい担当します。一つの曲を皆で奏でて、一体感を楽しむことができます。練習すると、さらに上手に演奏できるので、グループとして達成感が味わえたりします。和音も出したりできるので、すごく音色がきれいですね。楽譜が読めなくても演奏が可能なので、あまり音楽に精



写真11 トーンチャイム

通しているかどうかというのは関係なくできるものだと思います。ただ、学生相談室で用意できるトーンチャイムが二オクターブ、黒鍵を含んで二五音なので、それで演奏できるものを探すと、演奏できる曲が限られてきます。「きらきら星」「虫

の声」「エーデルワイス」「聖夜」「喜びの歌」「ナウシカレクイエム」などを使いました。皆もよく知っていて、難易度は高くないけれど、きれい……みたいな曲です。例えば四オクターブぐらいあったら、ポップスにも挑戦できるのかなと思ってます。

最後は七輪陶芸です。これは担当しているのが青柳先生で、毎年行っていてとても人気のあるプログラムです。作業工程が三つあり、一か月ほどかけて作ります。作業工程は、成型・彩色・焼成で、いろいろな体験を提供できるので、確かに学生が心を動かされるといいます。この部分が好きみたいな感じで、学生さんがどこかに楽しめる所があるのが魅力なのかと思います。



写真12 七輪陶芸（成型）

まず、成型の時点で粘土に触ります（写真12）。そこで、ちょっと遊びというか、小さい頃を思い出したり、この時だけに戻ってやってみようかなみたいな思ってもらえたらいいかなと思います。次に、釉薬をつけるんですけど、釉薬の色が直接出来上りの色になるわけではないし、途中で焼くという工程が入り、すぐ結果が出ないので、ちょっと楽しみであり、驚きでありという待ち時間を過ごすことになります。

最後の焼成の時間は、火を使います。最近はたき火もするような場所も、体験することもないので、とても迫力のある体験になっています。原始的で、ちょっと古代人になったつもりになれるというか、火遊びというか、そういう体験かなと思います。火にとっても刺激を感じるんですけど、それでめちゃくちゃ近づいてしまう人と、あと、怖くて、離れて見てるだけという人に分かれます。

この七輪陶芸でも、「好きなように作ってください」と伝えるのですが、いろんな条件のもと、失敗したり、思うように作れなかったりという結果に終わる場合があります。サイ

ズが大き過ぎてきれいに焼けない、割れる、ひびが入る、酸素との関係で思ったような色が出ない、また、花瓶のような高さのある陶器を作りたいと思っても、高さを出すにはちょっと技術が必要であってうまくいかないなどです。自由なやり方にはそれなりの結果が伴うというような現実との関係性が、安心できるある種の枠組になるのかなと思います。陶芸は制作から完成までに一ヶ月ほどかかるので、自分の思いがすぐに形になるわけではないという特徴があります。また、予想外な、ちょっと異質な出来上がりを驚いたり喜んだりという、ちょっとサプライズ的な楽しみも含まれるかなと思います。

### グループを通して見られる学生の成長

これでグループの紹介を終わらせていただきました。グループを通して見られる学生の成長で、ちょっと所感をお話しさせていただきます。

園芸から料理、陶芸のシリーズ物などに、単発ではなく複数回続けて参加する学生さんに、グループを通しての変化が分かりやすく見られると思います。続けて参加する学生さんをリピーターと呼ばせていただきますと、まず、数回続けて参加することで、場に慣れて緊張や硬さがほぐれてきて、安心して自分を出しやすくなるという気がします。学生同士も

距離感が近くなって、これは本当にグループらしいというか、ならでではですけど、自分以外の参加者のことも観察できるというか、見る余裕ができてきて、そうするとプログラム内容の違いで皆それぞれ得意不得意があるんだなということが、お互い分かるという場になります。

そうすると、結構知ることできて、お互い支え合ったり教え合ったりができ、自然発生的に主体性とか積極性が育まれるのかなと思います。特に料理のプログラムでは、共同作業ですけど、いろんな力量の人と協力して進めないといけないので、協調性も必要になってきますし、見ていると自然発生的にリーダーシップを発揮する学生が出てきたり、切り方なんかを教える側に回る学生が出てきたり、自分たちができることを必要な場所ですることが自然にできるようになるのだと思います。「みんなで協力できて、おいしいものが食べられてよかった」「ふだん自分がやらないことをいろいろ経験できてよかった」「アットホームな感じがとてもよかった」と感想をもらいました。

### 主体性を引き出すためのプログラム計画の工夫

主体性を引き出すプログラムの計画の工夫点で、まず大事にしたのは、季節を感じられるようにすることです。この季節だからその旬のものを提供したいです。旬の果物

や野菜、季節の草花は、彩りや香りや味覚もとてもよいものというか、マックスによいものが多いので、五感にはとてもよい刺激になると思います。

それから、プログラムに連続性を持たせたいと思ってます。収穫した野菜を使って料理をしたり、野菜をモデルに絵手紙のアートを描いたりということをやっています。

また、既成の枠組みと自由表現を合わせることが大事にしています。自由度が高過ぎると、最初から自由だと、やっぱり形や作品にならないこともあるので、少しこちらで準備をしておくことを心がけています。例えば一から描くと、やっぱり絵に関して苦手意識があると、なかなかチャレンジできないですけど、カラージュなど、もともとある写真とかイラストを使って配置するのであれば、自由に自分の世界が表現しやすいかなと思います。

そして、体験不足の学生さんが多いので、一応はこちらも見本を用意しておく。そうすることで、目指す方向性の一例を提示できるかなと思います。

あと、時間内に完成できて、満足感、達成感を味わえるもの、味わえる時間を提供することを目標にしています。むしろちゃくちゃ難しいのは無理ですけど、ほどよい難易度のものが成長意欲を促したり、達成感が味わえると思います。最近の学生さんはスマホをとても上手に活用しているので、

グループ中に満足できたとする作品の写真を撮ったりスマホの検索機能を使って自分の作品に取り入れたり、そういうことを上手にできているかなと思います。ただ、こちらで大丈夫と思って用意していたことでも、学生さんによっては作品にならない、できないこともあるので、時には臨機応変に枠自体を変える必要もあると思います。スタッフがどこまで手を出すかはちょっと難しいところだとは思いますが、せっかく来てくれてせっかくなのでくれたからにはよい印象を持って帰ってほしいと思うので。

最後に、参加してよかった、次回も参加したいと思ってもらえるようなグループでありたいと思っています。そうすることでもリピーターが増えるかなと思います。

### 今後の課題

考察と今後の課題です。これまで取り組んできたReアワーというグループが、学生の心の育ちにどのような影響をもたらしたかを考えてみます。

まず、体験をすることで、自分自身のことが好きになるというか、自分に自信が持てるようになると思います。自己肯定感をアップできて、主体性の育みにつながればよいと思っています。参加者が安心して自分の主体性を出せるグループ作りを目指したいと思います。自由と枠組みの共存とかバラ

ンスが大事かなと思います。

グループの場でお互いを知ることで自分を出すことが怖くなくなる、そして感情を出すことも怖いことではないと思ってもらいたいなと思っています。自分のことを理解し、一緒に参加されている他の学生さんのことも理解したり、お互い興味を持って見てもらうことで、他者の表現方法や自己開示の方法を盗み、モデルや参考にしてもらう場になればいいかなと思っています。

参加してよかった、次回も来たいと思えるグループを作ることで、グループの核となるリピーターの存在を増やしたいと思っています。やはりグループの中心として、グループ自体を動かしていくのはリピーターの存在かなと思います。ただ、その後のことは課題にもなるのですけれど、リピーターが増えグループの凝集性が高まると、ちょっと新メンバーが入りにくくなる面もあるかなと思っています。

それと、グループの中で、表面に見えることや、継続してなら学生さん一人一人の成長は見ることでできると思いますが、その場で起こっている内面の個人個人の心の動きに、完全に注目できているとは言えないので、その辺りをもっとより深く見ていけたらなと思います。どうしても準備とか進行に気がいってしまうので、できればスタッフは二名以上必要かなと思います。

そして、まず一定の人数が常集まってくれないとグループが成立しないので、どうしたら学生に興味を持って参加してもらえるのか、今も昔も永遠の課題かなと思っています。広報のやり方など、できることを工夫していかないといけないなと思っています。

あと、ここ一、二年のコロナ禍ですね。その中で、体験グループ運営の難しさは感じています。五感の話も出ましたけれど、直接触るとか、直接匂いを嗅ぐとか、食べるとか、そういう五感につながる体験が、コロナ禍でどれだけ可能なのかというところが難しいと思います。そして、やはり刻一刻とコロナで参加条件も変わってくるので、その都度できることを考えていかないかなと思っています。

以上です。御清聴どうもありがとうございました。

○高石 まさに、今現在グループの中心になって担ってくださっているだけに、とても力のこもった御発表をいただいたと思います。

ここで、研究所の森先生が途中で退出される御予定と伺っているのですが、学生相談室でこれまでやってきているグループの活動、特に園芸療法に関しましては、震災後から今に至るまで、人間科学研究所から助成も頂いて共同研究としてやっている唯一のプログラムでもありますので、もし可能

でしたら、森先生、ここで一言いただけるとありがたいです。

○森 二人の発表を聞かせていただいて、私も今までの過去二五年、二〇年を振り返っておりましたけど、一つ、背景となる予算として、やはり研究事業として採択されて、予算がついたことが、こういった活動の展開にかなり役立ったことは、そういうものに関わっていた一人として、非常にうれしく思います。

建物そのものもそうですけど、予算の基盤がないと新しい事業を展開していくことはなかなか難しいわけで、そこで生まれてきたものを今後、現在、どんなふうを受け継いで、かつ、また新しい形で大学の中に位置づけていくかということ、今の課題でしょうし、そのためにこの研究会も行うというところで、非常によい振り返りの機会だなと改めて思いました。

全体の中では、一つのテーマに過ぎないかもしれませんが、友久先生がおっしゃった、かつて学生時代に箱庭を作っていた学生さんに、かなり久しぶりだと思っただけでも、インタビューして当時のことを振り返っていただいたという報告があつて、これはなかなか興味深い視点です。

つまり、学生時代に経験したことは、その後の人生にどんなふうになかされてきているのか、あるいはどんなふうを受け継

がれていくのか、かなり長い年月を追って確認するってなかなか難しいことで、そういうことも大事なテーマだなと思っただけですね。

いわゆる卒後の方に対する支援も学生相談の大事なテーマだと思いますけど、甲南大学に帰ってきていただいて、当時、自分、学生時代にお世話になっていたカウンセラーが今もおられる場合は、久しぶりに面接をして、話し合うこともできるでしょうし、そんなことが御自身の学生時代を振り返ったり、考え直したりする機会にもなるとすれば、そんなことって、もう少し幅広く行われてもいいのになという。

現在問題を抱えていて、そして相談を続けたらいい、そういうことじゃなくて、振り返りとして、学生時代を振り返るための一つの場として使えることがもっとあってもいいのかなと思います。実際どうやってそれを実現するかは、なかなか難しいことかとは思いますが、ちょっと気に留めていただければありがたいかなと。

お二人の両方の発表に含まれることですが、グループの役割、体を使った活動ですか、身体性にどう働きかけるかことが全体に共通するものでありまして、そういう体験を提供することが、大学の中の様々の、身体を使うような活動は、サークルとか体育会とかいろんな形では行われているんですけど、その中で学相ができることという位置づけも、あまり

考えられたことがないかもしれないかなと思ったりしましたね。

二つあり得ると思いますけど、一つは、いろんな自分で開拓して経験をしていける方は、それはそれで大学生活を十分使っておられるので、学相が特別そこに支援しなくてもよい自分ではなかなかそういう経験を発見できないとか、そういう方にやはり支援していくのが学相の役割だという見方もあると思うんです。

他方で、だんだん全般的にそういった体験が不足している時代になってきているというか、そういう見方もできるかと思えます。ただ、皆さん、学生それぞれが自分で開拓していくことに任せていたのでは、不足してしまう方が多くなる。むしろマジョリティーの問題として不足したところが出てくる。そこを、どんなふうに学生さんに提供していくか。

一つが、自己の発見という授業としての提供も一つ大事なポイントだと思いますけれども、どんなふうにそれを。直接学生に提供するのではなくて、学相から見える課題を大学の教育の面に提言とか、そんな形で出して、大学として取り組んでもらうとか、大学で行われているいろんな活動をまとめて、まとめるというのは、直接協力することではなくて、どういことが行われているかということをそういう目で見て、視野を、マップを作るといいうか、見取図を作るとい

うか、何かそんなことを学生相談室がする。そんなことも学生教育への貢献であるのかなとか、いろんなことを思いながら伺っております。

ばらばらですが、こんなところでいかがでしょう。

○高石 私たちがなかなか、もやもやとしつつ、うまく言葉にできないところを、非常にクリアに、今、言葉にしていただいたなと思っています。

私たちが意義を感じつつやっていることですけれど、やっぱり体験が量的に計れない質的なもので、そこへの貢献をどのようにして、例えば大学に伝え、あるいは、もっと上に伝え、そのことの意義を共有していただいて、そこに人やお金をつけていただけるかみたいなところ、なかなかカウンセラーの弱い部分でもありますけれど、いろんなヒントを頂いたように思いますので、それを励みに、また次の一〇年ぐらいを見越して、頑張っていきたいなと思っています。

先生、お忙しいところを、今日は本当にありがとうございます。

(休憩)

○高石 後半、三人目の西浦太郎先生に「現代学生の主体性と

体験の可能性について―少人数ワークショップ型授業の実践から―というテーマで御発表いただきます。

西浦先生は、学生相談室では留学生への支援を中心になって行なってきたさっているんですけども、それと併せて、全学共通教育の実践というお立場からも学生教育について考えてくださっています。その授業に関する御発表、よろしくお願いたします。

### 現代学生の主体性と体験の可能性について

―少人数ワークショップ型授業の実践から―

○西浦 御紹介に与りました西浦です。

これまで長い間、学生相談室のカウンセラーが提供してきた授業をご紹介し、現代の学生の主体性について考えてみたいと思います。

### 授業「自己の探求」について

では、最初に、学生相談室のカウンセラーの提供科目の「自己の探求」について説明します。こちらは、二〇〇五年頃に、広域副専攻センターのカリキュラムの見直しに際して、学生相談室よりワークショップ型少人数科目の導入の提案をし、全学的な検討を経て二〇〇七年より開講し、現在も継続

しています。

当時は、健康科学コースの一科目で、配当学年は、理系の一年生や文系の二年生でした。一から四クラスあり、そのうちの一から三クラスは人数制限があり、四クラスのみ人数制限がありませんでした。履修条件は、高石先生が御担当されている「心の科学」を習得済みの学生が履修できるものでしたが、こちらは二〇二一年度から撤廃になっています。その後、名称が変わり、現在は共通教育センターの基礎共通の科目となり、今も学生相談室のカウンセラーが授業を担当しています。

授業では、陶芸、茶の湯、ボディワークなど五感を通して自己表現を少人数で行い、学生が自己理解を深めたり、対人関係力の向上を目指しています。授業の目的は、「普段の生活では体験することが少ない、五感―身体を使う体験を通じて、自分についての新たな気づきを得る」とされています（青柳寛之「カウンセラーによる全学向け少人数体験型授業の試み―陶芸グループを中心とした概要の紹介と受講者アンケートの分析」甲南大学学生相談室紀要第一八号、二〇二一年、一八一―二八）。

では、テーマの方に移りたいと思います。最初に、今回の「学生の主体性を育む」という題を頂いたときに、とても難しいテーマだと思いました。というのも、最近の臨床心理学

では、主体を育むのはすごく難しいと言われているからです。これは、岩宮恵子先生が言っていることですが、カウンセリングの現場でクライエント、相談に来られる方が、なかなか葛藤できなかつたり、悩めない傾向がありまして、昔と比べて随分と、自分について考える力が弱まっていると言われています（岩宮恵子「フツの子の思春期―心理療法の現場から」岩波書店、二〇〇九年）。

このように主体性の脆弱化は、かなり前から指摘されていますが、私は海外に長く住んでましたので、よく日本の方が「主体」という言葉を使ったり、「主体を育む」と言うときに「主体とは一体何を指しているのだろうか」、「主体を育む」ということはどういうことなんだろう」と、自分の中で悶々としています。それで調べてみたんですけども、大辞泉という辞書では、主体性は「自分の意思・判断で行動しようとする態度」とありました。

また、主体と関係あるものといえば、「自我」ですが、自我は、英語で「ego」にあたり、これはラテン語から由来しています。心理の業界でもよく「自我」が使われていますが、これにはフロイトの影響も大きいかと思えます。フロイトはオーストリア系ユダヤ人で、ドイツ語でものを考え、面接をし、著作を書いています。彼は「自分」のことを言う際は、「ego」ではなく、日本語の「私」にあたる「Ich」という言



葉を使っています。これは、英語の「I」にあたります。今では、心理の方々が「自我」という言い方をされますが、本当は「Ich、私」という、ドイツ語では一番プレーンで、皮膚感覚で使われていたものがフロイトにより使われていました。

ただ、フロイトは、自分の本をドイツ語から英語に訳すときに、精神分析が学問・科学として認められる必要があります。それで英語版の翻訳を担当したストレイチーに「私」という訳語に対して「ego」という言葉を採用してもいいと言った経緯があります。(Strachey, J. 1976 The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud (24-Volume Set. W. W. Norton & Co. Inc.)。認められるための一つの戦略だと思のですが、これが契機となって、「ego」がイギリスやアメリカ大陸などに浸透していきました。

これは非常に残念なことです。というのもドイツの日常生活では、「Ego」という言葉はほとんど使われません。使われたとしても、ネガティブな意味合いが強いものばかりです。例えばドイツ語では、「egoistisch」とか「ego-zentrisch」と言われますが、直訳すると「自我中心的」、日本語でいう「自己中心的」という意味で使われますので、九割方ネガティブな意味合いです。ですから、「ああ、あいつ、ちょっと自己中だね」というときには、必ず「ego」が使われます。これは、語感的なものです。が、「ego」は、「自己中」とか

「私だけ」というように他者が見えない意味合いが強くて、どこか単相的な一つの層というイメージです。

「Ich」は本来、よく分からない未知のものや、他者性がすごく含まれる言葉で、深い多様な心の世界を示すものです。ですので「私」や主体を考えるとときに、もう少し、こういった自分にとっては未知なもの、自分の影響が及ばない他者性など、自分を超えた存在を見ると、面白いのではないかなと思います。我々が、今回のテーマの「学生の主体性を育む」といったときに、何か単一のものではなくて、多層的で多様な側面を持つ「私」を育むことが大事なのではないかなと思います。

#### 授業での色々な取り組み

では、授業の取り組みですが、授業では色々なことをやってみて、そのうちのひとつに、学生に野菜に触ってもらうことをしています。最初にクラスの学生全員に目隠しをしてもらうので、視界は真っ暗になり、何も見えません。この暗闇の中でトマトに触ってもらったり、いぼいぼのブロッコリーにも触ってもらいます。あと、ちょっと重たいですけど、キャベツとかも授業前にスーパーで買ってきて、触ってもらっています。学生の反応としては、「これ、何や」とか、「ぎゃー」ということは多いですけども、大学に来て、まさ

か暗闇で野菜を触るとは思っていないようです。結構、リアクションが大きいのは男の人だったりします。渡されるのを怖がって「いや、おまえ、渡すなよ、渡すなよ」とか言っていて、急に緊張したりして結構、面白い反応が見られたりします。

それと、授業ではブラインドウォークを取り入れています。二人一組でペアを組んで、それぞれ役割分担をしてもらいます。一人がさっきのアイマスクをして歩く側になってもらって、もう一人が、その人を案内する側になります。それで歩く所ですが、学内の安全な場所から始めるんですけど、案内が終わったら、役割を交代して今度は、案内した人が目隠しをして、案内付きで歩いてもらいます。その後、体験の振り返りをしてもらう、という流れです。これを、数か月かけてグループ内でペアを交代しながらしますので、時間をかけて体験を深めていくことになります。

最初に歩くルートですけど、学内の平坦で真っすぐな五〇メートルぐらいの道です（写真13）。このルートを歩いた学生のコメントは、案内される方は「とにかく怖かった」という意見がかなり多いです。それと「いつも歩いている同じ道とは思えない」とか「短いと思ったら、すごく道が長かった」といったこともよく言われます。あと、自分の案内をしてくれた人に関して、「ゆっくり案内してくれた。ありがたかった」という人もいます。また、「言葉がけがすごくありがた



写真13 平坦で真っすぐな道

もいます。ここは出たとこ勝負で、ペアを組んだときにどうなるかという面もあります。

案内する方も、最初は、かなり戸惑いが多くて「どう案内したらいいか分からなかった」と言う人もいますが、その後「目隠しをして、実際に歩いてみて、どれだけ怖いかわかった」という人もいます。ですから、頭で理解するだけではなく、両方を体験することが大事だという気がします。

最初の段階は、サポートをする側と案内される側の困惑とか戸惑いがすごく大きいですが、それで学生同士の関係が陰悪になってしまう時期でもありますので、こちらもかなりび

かった」という人がいますね。「段差ありますよ」とか、動き始める前に「『いいですか。じゃあ、右足から行きましょるか』と言ってくれたことが、すごくありがたかった」というような感じですね。

その一方、ガイドがあまりしっかりしておらず「もっとしっかりリードしてほしかった」という、見えない中で怖い体験になってしまった学生



写真14 でこぼこの道

りびりして見守ることになります。  
目隠しをされて歩くときに、案内される側はすごく怖い思  
いをしますが、案内役が相手の気持ちやリズムを感じ取って  
それに合わせるのには難しいです。あと、歩くとき、一方だけが  
頑張っ呼吸を合わせていても駄目で、お互いが呼吸や歩調、  
歩幅を合わせないと、進んだり止まるのはすごく難しいので、  
呼吸を合わせる事がすごく大事です。

背景には、やっぱり相手のリズムに合わせる事がすごく  
難しく、硬さが見られることがあります。最初は、学生は  
どうしても自分の感覚に頼りがちで、相手の感覚とか視点、  
立場に立って案内するのは難しいのだと思います。

こちらが二つ目の道です（写真14）。少し長めの道で、大  
体一〇分ぐらいのコースです。足場が不安定でカーブが増え  
るので、よりお互いの息の合ったワークが求められます。た

だ、ペアを組  
んでワークを  
してもなかな  
か硬さが抜け  
ないので、途  
中で、二人一  
組で生卵を投  
げ合ってもら



写真16 目を閉じて上る階段

います。一人が投げて、もう一人がキャッチすることを繰り返す  
返すものですが、学生の皆さんは、「何で卵を投げるんです  
か？」と戸惑います。これについては、また後で述べたいと  
思います。



写真15 最も難易度の高いコース

り口がスタートになります。この奥  
の階段を上がって、左に入っていく  
ますが、これも目隠しをして歩いて  
もらいます。

やっぱり目隠しをした状態で、階  
段を上がっていくというのはかなり  
難しいですね。というのも目を閉じ  
ている状態だと、階段の高さや階段  
が何段あるのか分からないので（写  
真16）、普段の階段とは違う体験を

こちらが最  
後の一番難易  
度の高いコー  
スです（写真  
15）。学生相  
談室がある一  
八号館の建物  
です。外の入



写真17 建物に入るときドア



写真18 目を閉じて座る椅子

で、案内する人は注意が必要です。その後にもう一枚、ドアがあり、それを開けると正面に椅子が四つ、机がある状態になります。私から案内する方に事前に「椅子（写真18）に座らせるように」と伝えていますが、目が見えない状態で腰を落として座るのは、すごく怖いので、案内する人に声かけや速度、リズムなど色々と考えてもらいながら、ゆっくり座ってもらっています。

していくことになりま

す。

これが建

物に入ると

きのドアで

す（写真

17）。この

ドアがなか

なか重たく

て、案内し

ながら開け

るのはすご

く難しいの

### 学生に見られる変化

では、こういったブラインドウォークをして、学生に見られる変化に触れたいと思います。

一つ目が、「自分を知って、相手を知る」ことが挙げられます。人は、どうしても自分の感覚に偏りがちで、相手の視点や立場に立つことがすごく難しく、それが硬さにつながりますが、自分が逆に目隠しをして案内してもらうときに、自分が安心できるポイントは分かりますし、逆に相手を案内して、相手が安心できるポイントを知ることができまますので、自分が寄って立つ視点とか足場はどこか、すごく分かるということです。

例えば、Aさんには言葉かけが大事で、「階段ちょっと高いですよ」とか「もうちょっと上げてください」と丁寧な言葉かけをする人がいいという人もいます。ただ、Bさんは、そういった言葉よりも、ちょっと腕を差し出してもらおうとか、そういった触れることに安心感を感じて進めるとか、人によってさまざまです。

こういうことから、自分や相手のことを知って、そこからお互いへの配慮とか想いとか、いろんな考えが生まれてきます。これがベースになって少しずつ相手のリズムとか主体に合わせることで、お互いの呼吸が合っていくように思います。こういったこと積み重ねることで、お互いの信頼関係の基盤

が少しずつ作られて、関係が深まると感じています。お互いのペースに合わせることは、ただ単に呼吸を合わせるだけではなく、もう少し相手の主体に、こっちの主体が触れる、主体同士が触れ合うことをやっているのではないかと思えます。

さっきの卵のキャッチボールをする理由ですが、卵はすごく傷つきやすいので、割らずに受け止めるには、優しくさだけでは不十分で、やっぱり卵の形をしっかり見る必要があります。しかも受け止めるときはこっちも膝を柔らかくして、クッションのように受け止める、ただ、それだけではだめで、しっかりと支えることが大事です。ですので、そういった意味も込めながら、卵でキャッチボールをお願いしています。

村上春樹がエルサレム賞を受賞したときに「壁と卵」というスピーチをしましたが、彼が言ったのが、私は作家として、とにかくいつも卵側の立場の間人だと言っていました。つまり、すごく傷つきやすく、弱くて、中身がもろくて、壁にぶつかったらすぐ潰れてしまうけども、そういった立場の人たちから、いろんなものを想像するということです（村上春樹「雑文集」新潮文庫、二〇一五年）。

卵のキャッチボールは、母親や周りの人が赤ん坊を抱っこすることと同じで、普段人と関わっていませんが、その人と本当に深く関わるということは、人の命とか痛みとか弱さに触れることにもつながってきます。ですので、人は人と関わる

中で主体性が生まれ、育まれる面があるといえます。こういった体験も一人ではなく、相互の主体があって初めて成り立つものなので、大学のうちに経験しておくのと大きいと個人的には思っています。

あと、「学生同士の関係性の変化」が挙げられます。最初授業が始まったら、すごくよそよそしい雰囲気ですけども、手探りでブラインドウォークをやって回を重ねていくと、少しずつ関係が動いていきます。

学生は、大体、大学の授業が終わったら、さっと帰っていくことが割と多いと思います。中には仲良くなる人もいますが、ただ、ブラインドウォークとか体験に根づいたことをすると、体とか感覚とか感情を総動員して、うれしいとか怖いとか怒りとか、そういったこともみんなと一緒に体験するので、言語を主体とする授業とは異なる関係の深まり方をします。

学期の終わり頃には、みんなと別れることをすごく惜しむ学生もいます。ほかのクラスの学生からよく「何かすごく仲のいいクラスだね」と言われました。

これは私の主観ですが、授業を経て、その人の存在を感じたり、知る手がかりは、やっぱりブラインドウォークをして増えたかなと思います。授業を担当していると数が多いので「こういう学生だったかな」と思い出すのは、結構難しいので

すが、この授業の学生は、今でも目を閉じると、「ああ、こういう人だったな」ってぼっと出ます。そういうったことも、相手を知ることにつながっていると思います。

改めて「主体」を考えると

最後になりますが、「主体」を現代の文脈を交えて考えたと思います。最初にドイツ語や日本語を出しましたが、ギリシャ語では主体は、「根底にあるもの」、「基体」となりま  
す。また、主体には、「認識論では、主観と同義。個人的、実践的、歴史的、社会的、身体的な自我の働きが強調される場合、この主体という言葉が用いられる」とあります（『大辞泉 増補・新装版』小学館、一九九八年）。つまり、人間の主体は人だけではなく、歴史・社会、身体、いろんなものが関与していますが、こういったことが主体を考えるとときに関わると覚えておくといいかもかもしれません。

最近、国は、小学校でのプログラミングを必須にし、ICT化やICT教育を推進しています。コロナ禍により遠隔授業も大分浸透し、この動きに拍車がかかった面がありますが、これにはいい面と悪い面があると思います。

オンライン授業を受けた学生と話していて「授業で誰か他の人と話した？」と聞くと、「授業に関係することだけ」と言っていました。「それ以外、何も話さないの？」と聞くと

「話さないです」と。もちろん、ブレイクアウトルームを入れるとかオンラインの授業は、改善はされてきてはいますが、コロナ前は授業が始まる前後の時間が、つながりとか人との関係に結びついていたのだと思います。

オンライン授業では、速さや利便性、合理性が追求されていきます。もちろん、それにより色々なバックグラウンドを持っている学生が授業を受けやすくなりますが、対面には対面のよさがあり、いろんなものを生み出す触媒になる可能性があると思います。授業の時間の時間も一見、無駄に見えますが、すごく必要とも言えます。

デジタル教育は、今後、ますます強くなりますが、こちらから働きかけていかないと、そういった経験を可能にする空間が少なくなっていく気がします。ですので、今後、体験型授業や学生相談室ができることは、気づいたら人と人がつながる触媒になるような場所や、人を包むような場所を作ることなのかなと思っています。

○高石 それでは、三名の先生方の御発表がこれで終わりましたので、ここで室長の山崎先生からコメントと御挨拶をいただけたらと思います。

山崎先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 指定討論

○山崎 皆様、こんにちは。先ほど紹介していただきました、甲南大学カウンセリングセンター・学生相談室所長の山崎優輔と申します。

まず皆様に、お礼とご挨拶をさせていただきたいと思いません。

本日、甲南大学カウンセリングセンター学生相談室、人間科学研究所共催の公開研究会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

「学生の主体性を育む大学教育実践の試み」と題しまして、友久先生、渡里先生、西浦先生から貴重な発表をいただきました。誠にありがとうございます。

この度のコロナ禍で我々も皆様と同様、大きな困難と混乱を受けています。甲南大学学生相談室としまして、感染防止に全力で努めながら、「様々な学生が安心して学び、大学の建学の精神である、個性が尊重され、個々の力が最大限に発揮して、社会の中で自己実現できる様、個別・少人数での心の支援をする」という本学学生相談室の活動指針を可能な限り推進しようと、高石先生を中心に皆で力を合わせて努力を続けている所です。

コロナ禍、ウィズコロナ、アフターコロナという言葉が最近よく耳にします。世の中の全てのごとは、過去、現在、将来の一連の中で成り立っていると思います。過去の経験や知識、また成功体験や失敗から学んだことを確認する。そして刻々と変化する現在の状況の中で、新しい知識や方法を用いながら、将来に対して働きかけていく。そして次なる未来の状況を冷静に予測しながら、準備を計画的にしつかりと整えていく必要があると思います。

コロナ禍で苦労した体験の中で、人として、また学生としては、心身共に健康に成長し、生きがいを持って生き抜くためには、何が必要で、また何が大切なのを多くの人々は気づいたと思います。「人と人とのつながりの大切さ、お互いに助け合うことの大切さ、また家族や友人の大切さ。そして心と体の健康のありがたさ」等、今回のコロナ禍の苦しい体験の中で、多くの人々が感じたのではないのでしょうか。

本日、先生方に発表していただいた内容は、現在、将来において、我々がより大切にしなければならない大切な示唆や貴重な内容が多く含まれていたように思います。

まず三人の先生方のお話の感想と質問を述べさせていただきます。三人の先生方に共通した質問として、先程、西浦先生も述べられていましたが、「学生との距離の取り方」があります。私は体育の教官で柔道を専門としており

ます。特に柔道の場合は、実際お互いに肌と肌を合わせて行うスポーツです。

今の若者は、子どもの時から体と体を触れ合ったり、子ども同士でじゃれ合ったりする経験が少ない傾向があります。相手との距離を取りたがると思いますか、体と体を直接触れ合わせることに対して、以前より抵抗感が強い若者が多くいる様に思います。

私が指導する中で、特に注意していることは、子どもでも大人でも同じですが、最初から体を直接触れ合ったりするのはなく、最初は少し距離を置いて、明るい挨拶から始め、お互いの身体的な距離や心の距離を徐々に縮めていく。例えば、じゃんけんをしたり、腕相撲をしたり、鬼ごっこをしたり、そういう楽しいことをしながら、お互いの信頼関係を少しずつ高めていく。そして少しずつ本題である柔道を体験していく。先生方もそれぞれの活動の中で、「学生同士の距離間、学生と教官との距離間」の取り方の工夫や苦労話があればお聞きしたいと思います。

次に、それぞれの先生方の個人的な感想や印象に残ったことを少し述べさせていただきます。

最初の友久先生の中で印象に残ったのは、茶道を活動の中に取り入れているお話です。茶道の目的や効果の中には、武道と同様、「お茶を通した人づくり」というものがあると思

います。

まず形や作法から入る。柔道でも同様ですが、まず姿勢や形を身に付けることを大切にします。日本の武芸全般や座禅等にも同様の考え方があると思います。まず身体・姿勢を整える。次に呼吸を整える。最後に気持ちを整える。「心身一如」、「心技体」と言いますか、そういうものの大切さを感じました。「人づくりや教育」の中でも大切な要素であると思います。

渡里先生のお話の中で、特に印象に残ったことは、人間関係を構築する場所を作ることです。「環境が人を作る」と言われますが、人間が成長していく上で、良き環境を作るということが大切です。そのような中で人は自分の存在感や生きる楽しみを感じるのではないのでしょうか。「良き環境を作ることの難しさ」、これは社会であっても、家庭であっても、あるいはクラブであっても同じだと思います。

「個々が生き生きとして活動し、お互いに協力し合う環境」この様な雰囲気の中で、より健全な人間性が育まれていくのではないかなと思います。

次に西浦先生のお話ですが、先生がお話された内容と少しずれているかもしれませんが、今回の二〇二〇東京オリンピック、パラリンピックは、多くの問題を抱えながらも開催され、何とか無事に終了致しました。厳しい世界的なコロナ



禍の中で、「本大会をやっているのだろうか」「スポーツの意義、オリンピックの意義は何だろうか」等、国民の意見が大きく二分されました。このような雰囲気の中で開催されたのですが、実際に大会が始まると、選手たちの素晴らしい活動や真摯に一生懸命取り組んでいる姿に多くの人々は感動しました。オリンピックでの選手の活躍する姿も素晴らしいですが、特にパラリンピック選手たちの「自分の限界を作らず、可能性を信じて努力する姿」に多くの国民は魅了されたのではないのでしょうか。

選手たちのインタビューの中で、特に印象に残っている言葉として、「メダルを取ることを通して、人々に感動を与え、周りに感謝し、お世話になった方々に恩返しをする。」また、「この厳しいコロナ禍の中で苦勞されている方々に、少しでも元氣や勇氣を与えることができれば」等の言葉が、私自身の心に強く印象に残りました。

西浦先生の話の中で「主体性」というお話がありました。選手たちもメダル獲得の先に見ているもの、「頑張る目的、生きる目的」そういうものをしっかりと思つながら、「主体的」に努力している姿があったのではないかと思います。

先程の友久先生のお話の中でも、お嬢様が一九九五年の阪神淡路大震災の直後、自宅に帰ってこられて、大混乱の中でもボランティア活動をしながら生き生きといたと言われ

ていました。

「人のために役に立つ」、「お互いに協力して活動する環境づくり」、「主体的に生きる」ということは、人が健全な心を育み、生き生きと生活して行く上で非常に大切なことではないかと思います。

本研究会有意義なものになることを心より願っております

○高石 御紹介を漏らしましたが、先生は柔道の御専門でいらっしゃるんですが、体のトレーニングだけではなく、心と体とトータルな、総合的な健康を、学生さんたちがどうやって自分自身で作って出しているのかにもすごく熱を入れて、御指導に当たってくださっている先生です。

御質問があったと思います。お一人ずつ答えていただいたらいいのかなと思います。

最初のほうで、小さいときから組んずほぐれつ肌と肌を合わせて遊ぶことの減っている今の子どもたちが学生になったときに、やっぱり柔道もそうですけど、肌と肌を合わせて、体験的な教育はそういう側面があるわけですけど、それに慣れていない学生さんたちとの距離の取り方は結構難しい部分があって、下手をすると、そこをこちらが介入し過ぎて、傷ついたという体験になる。

西浦先生の御発表にも、(ブラインドウォークの)一回目が一番険悪というお話がありました。あそこで終わってしまったら、傷ついただけで終わります。ちゃんとそれを修復して、学びになるところまで持つていくことに授業の意味があるわけで、そういった点で、友久先生が工夫してこられたこと、感じてこられたことがあればということです。

○友久 私は茶の湯を担当してたんですけど、とても茶の湯は便利といえますか、長い歴史の中で、洗練された型がありますので、授業ではそれをまず私がすること、次にそれをまねて学生さんに自分で型をしてもらうことになり、相当距離が近づく感じはいいです。でも、いろいろな型が進んできても、向き合ってお辞儀をするとか、お茶を飲むとか、おいしいと感じるところから、だんだんと距離が近づいていく感じ。そういう意味では、「茶の湯」というツールで授業を担当できたのは、とても有難かったと考えています。

柔道のように直接身体を触れることはありませんが、同じものを飲むとか食べるというのはとても距離が近づきます。初めから一碗で飲み回すとかはできないと思います。でも、型がありそれに従って学んでいくと、距離のあるところから徐々に安全に近づいていけるのではないかと感じていきます。

○高石 渡里先生、いかがでしょうか。

○渡里 私も肌を触れ合うことへの感じ方には個人差があるの。で難しいかなと思って、なかなか取り入れてないかなと思っ。て聞かせていただいたんです。とりあえずグループ運営としては、毎週同じ時間に、ここで同じ人が集まるとか、場の安心感をまず味わっていただくというか、そこで安心感を持っていたから、ゆっくりという感じでやっていったかなと思いました。

○高石 ただ、場を共にするだけでも、いろんな葛藤やあつれき、対立やけんかや、いろいろ事件は起きていたこともあったと思いますけれど、その辺りは、かなり慎重に気を配りながらやってこられたということ。

○渡里 はい。

○高石 西浦先生、いかがですか。

○西浦 友久先生の話をしてますと、型があるのはすごくうらやましいと思いました。授業でいきなりブラインドウォークをやるって、かなり難易度が高くて、学生にとってもすごく怖い体験です。

ですけど、パラリンピックもそうですけど、目が見えないとかは、本人が望まない試練だと思っんです。試練に向かっ。て行っ、そこから何か得られるのか、それともそこで潰れてしまっのか。とても難しいですが、どうやってその人が何かをつかんでいけるかが大事になると思っました。ただ、そ

の先に何かあるのかというのには本当に難しいところで、それこそ学生一人一人から教えてもらおうという実感を私は持っています。

○高石 今回、学生さんも参加して下さっているんですけど、今どきの若い人はみたくない、体験不足でみたくない、何かが足りないみたいいな話になっていて。でも、今を生きている方たちは、それがデフォルトというか当たり前の中で、何かが足りないという実感はなくやってきておられると思うんです。

そういう立場から、また今日のような、私たちが考えていることを聞かれて、何か御感想あれば、ぜひ一言いただきたいなと思いますけど、なかなか手を挙げるのは難しいかもしれませんね。

本当は、ここからディスカッションをといたところで時間が来てしまっていて、とても残念ですけれども、御感想等々ありましたら、また。

○山崎 茶道、料理、またスポーツにしても、活動し継続していく上で、皆でおいしいものを食べたりして、頑張ったご褒美とか楽しみも必要じゃないかと思えます。お子さんが宿題するときでも、終わった後お菓子がもらえる。私たちも、それを子ども時代にはとても楽しみにしていましたよね。

私も子どもに柔道を指導する時には、頑張った子どもには、よくお菓子を配ったりして、気持ちを引きつけたりしていま

す。人を動かし、人を育てていく上で、そのようなことも大事じゃないかと思えます。

○高石 とにかく、いろんな五感全ての総合的な体験を誰かと共にすることが、私たちの心、主体性を育てていくことなんだろうと思います。最後に今回の企画のタイトルをこのようにつけた意図のお話だけ、一言、司会からさせていただきますので。

あえて主体性ということテーマに挙げましたのは、一〇年ぐらい前から、多分、経済界の要請で文部科学省も高等教育に対して、学生のコミュニケーション能力を育てなさいとか、主体的な力を育てなさいとか、そういうことを非常に声高に言われるようになって、そのときの「主体性」は、どうもよく見ていると、アクティブなことである、能動的なことである、ポジティブなことであるという、結構一面的な印象があつて。そうではなくて、今日、三人の先生方の御発表を改めてお伺いして、共通点は、やっぱりそこだなと私なりに確認しましたのが、私たちが育てようとしている主体性は、別に自立性とか独立性とか積極性とか何かができるということではなくて、やっぱり人と人との間の相互主観性、相互主体性で、相手の立場に立てる、共に感じる、共感する力が育ってくる、そういうところを何とかして今の時代に補っていきたいということを、私たちが共通して感じながら活動して

きているんだと改めて確認することができました。

私もとても励みにもなりましたし、森先生、山崎先生にも、客観的な目でも、そこを確認していただけたので、御発表の先生方は、まとめるが大変だったと思いますけど、こういう節目を持つことができて本当によかったなと思っています。

本当は、皆さんと、ここから自由にディスカッションをしたいですけど、オンラインでは、対面のときのようにちょっと延長するというわけにいけないので、びったり終わったほうが良いと思いますので、残念ですけど、ここで区切りとさせていただきたいと思います。

学生相談関連の先生方、御参加いただいている方は、また別の機会でも、いろいろと交流、今後もできたら、とてもうれしいと思っています。今日は本当に長時間ありがとうございます。今日は、これにて終了とさせていただきます。

〔付記〕参加者との質疑については、紙数の都合もあり割愛させていただきます。